

## 『総義歯によるアンチエイジングと印象採得』

小林賢一

1930年、Campbellは、“患者が装着している総義歯の90%は、芸術的ではなく、ひどいものである。人工歯は、白く、小さく、機械的であるばかりでなく、見た目も見苦しく、患者の個性と調和していない。人工歯にとり、最も重要な機能は、審美である。総義歯患者は、まず快適さを望み、次に審美、そして最後に咀嚼などの機能を考える。”と述べています。70年以上経過した今日でも、その現状はあまり変わっていないように思われます。

博報堂生活総合研究所の調査によると、実年齢と実感年齢が「ずれている」と考えている人が増えており、50代以上では11.1歳、実感年齢の方が若いと答えています。これは、昔に比べて寿命が延びていることに由来するものと考えられ、人生が50年、60年の時代の60歳代と、現在の人生80年の60歳代とでは、実年齢の感じ方が異なっており、実年齢が絶対的尺度ではなく、相対的尺度にすぎないことを示しています。

このことは、患者のニーズが我々歯科医の考えていた“年齢に応じた審美”ではなく、“より若くありたい”という“アンチエイジング”の欲求が非常に強く、この“アンチエイジング”の欲求を考慮して治療を行う必要があることを示しています。しかし、いくらアンチエイジングといっても加齢に伴う口腔の変化について知らなければ、アンチエイジングを実践することは困難です。

高齢者においては、口腔周囲の顔貌の衰え、変化に自らの老いを感じると言われており、特に加齢に伴う上唇のたるみを解消することがアンチエイジングにつながると考えられます。咬合高径に関し、Mohindraらは、咬合高径を挙上した総義歯患者96人および客観的評価を得るためのパネラー5人を対象に患者の術前、術後の顔写真を用いてアンケート調査を行っています。その結果、80%近くの患者が、咬合高径の挙上により5-15歳、パネラーでは5-20歳若返ったと報告しています。審美的に改善された部位として、口唇、顎および下顎の輪郭をあげています。

このように総義歯補綴によるアンチエイジングには、適切な咬合高径およびリップサポートの付与が必須となります。さらに前歯部人工歯の配列に関しても、「老化」を予防可能な「病気」と捉えて「治療」するアンチエイジングの考え方からすると、歯に生じる加齢変化を人工歯にわざわざ与える必要はありません。とは言っても、60、70歳代の患者の人工歯配列時に20歳代の天然歯を模倣するのは、無謀です。前述したように、高齢者は実年齢よりも10歳以上若いと感じているので、実年齢の2割程度若返るように仕上げることで、年齢に合った審美性と患者の満足を得られるのではないのでしょうか。また、義歯に与える下顎位の誤りも顔貌の崩壊を生じるので、正しい下顎位を設定することが義歯を咬めるようにするだけでなく、審美的にも良好なものとなります。また、適切に床外形が設定されなければ、上下顎義歯の維持・安定が不良となり、アンチエイジングどころではなくなります。

そこで、次に無歯顎者に対する印象について解説します。無歯顎の口腔にはインレーやクラウ

ンブリッジのような明確なマージンがなく、頬や舌、口腔底など総義歯を取りまく軟組織は、口腔が機能するたびに大きく変化します。そのため、一般に総義歯の印象は困難なものと考えられています。特に、下顎は上顎に比べ、難しいと言われていています。これは、上顎の場合は、筋の付着を超えないように義歯床縁を設定するのに対し、下顎では、筋の付着を越えて設定しなければならないことに由来します。すなわち、上顎では、impression taking でそこそこの印象が採得可能となりますが、下顎では、impression making を行わなければ、正しい床外形を設定することができないということです。また、下顎の床外形は、筋の付着を越えることにより、ある一定の形、すなわち普遍的形態を呈することとなります。

最初に総義歯印象法の歴史について、次に下顎総義歯の普遍的形態を印象採得時にどのようにして求めたらよいか解説し、合理的な予備印象採得、仕上げ印象材としてのシリコーン印象材による印象法を紹介します。